

## 日語複合動詞“Utikomu”之語義分析

馮寶珠

輔仁大學日本語文學系 副教授

### 摘要

本論文擬使用辭典定義和日本國立國語研究所少納言語料庫用例，分析日語複合動詞“Utikomu”句的基本語義和延伸語義。其次，使用日本國立研究所的『分類詞彙表擴充修訂版』考察“Utikomu”句前出現的名詞。

使用“wo”格助詞的“Utikomu”複合動詞句，表示「外力施壓的內部移動」(基本語意)，出現的名詞為「1.4 產品和用具」的「產品、材料」；使用“ni”格助詞的“Utikomu”複合動詞句表示「主體癡迷地專注於某事物、藝術、行動」(延伸語義)，出現的名詞為「1.3 人類活動—精神和行為」的「活動、事業」。

**關鍵詞：**複合動詞、基本語義、延伸語義、分類語彙表

# 複合動詞「打ち込む」の意味分析

馮寶珠

輔仁大学日本語文学科准教授

## 要旨

本稿は日本語の複合動詞「打ち込む」を考察の対象として、主にコーパスと辞書から検索したデータを利用して、「打ち込む」の基本義、意味拡張を明らかにすることを目的とする。また、本稿では国立国語研究所『分類語彙表増補改訂版』における「打ち込む」の共起名詞を考察する。

日本語の複合動詞「打ち込む」の意味特徴は「ヲ格」を伴う場合、「対象の外部から中への移動」(基本義)を表し、共起する名詞は「1.4 生産物及び道具」の「生産物、資材」である。一方、「ニ格」を伴う場合、「主体が精力を注いである物事・芸術・行動に夢中になる」(拡張語義)を表し、共起する名詞は「1.3 人間活動-精神及び行為」の「活動、事業」である。

**キーワード：**複合動詞、基本義、拡張語義、分類語彙表

## **A semantic analysis of a Japanese compound verb "**

### **Utikomu "**

Ferng, Bow-Ju

Associate Professor, Fu Jen Catholic University, Department of Japanese  
Language and Culture, Taiwan

### **Abstract**

This study examines the basic semantics and extended semantics of the Japanese compound verb "Utikomu" by the definition of the dictionary and the corpus of the Japanese National Language Institute. Secondly, the nouns appearing before the sentence "Utikomu" are analyzed using the Classification vocabulary table enlarged and revised edition of the National Institute of Japan.

As a result, 1) The "Utikomu" compound verb using the "wo" auxiliary word means "the internal movement of external pressure" (basic semantics), and co-occurring nouns are "products, tools" of "1.4 products and materials"; 2) The "Utikomu" compound verb using the "ni" auxiliary word means "the subject focuses on and is crazy about somethings, arts, actions " (extended semantics) ,and co-occurring nouns are "activities, projects" of "1.3 Human activities - spirits and acts".

**Keywords:** compound verb, basic semantics, extended semantics,  
the Classification vocabulary

# 複合動詞「打ち込む」の意味分析

馮寶珠

輔仁大学日本語文学科准教授

## 1. はじめに

浅尾（2007）は『CD 毎日新聞'95 データ集』の本文を対象に複合動詞の生産性の検証を行い、「～込む」がその使用率の一番高い複合動詞であることを指摘している。また、2.1 節で述べる辞典・辞書類を用いて複合動詞「～込む」を調べてみると、「打ち込む」は「打つ」と「込む」を構成要素とする複合動詞であり、「くぎを打ち込む」のように「たたいて中へ入れる」という語義のほかに、「敵陣へ打ち込む」のように「相手の陣に入る」という意味や、「仕事に打ち込む」のように「夢中になる」意味など、さまざまな語義を持つ多義語でもある。

これまで多義語に関する研究には主に「打つ」や「切る」などのような本動詞を対象に考察してきたものが多く見られた。しかし、「打ち込む」などのような複合動詞を対象にして、その多義構造や意味用法に関して研究するものがそれほど多くないように思われる。日本語母語話者にとっては複合動詞の多義性がそれほど大きな問題ではないかもしれないが、中級や上級の台湾人日本語学習者にとって、習得しやすい学習項目とはいえない。

そこで、本稿は「打ち込む」という多義語の各意味が辞典・辞書類の中に記述されているかを確かめながら、その意味分析の一側面（多義構造）を明らかにすることを目的とする。

本稿の構成は以下のとおりである。まず、第 2 節では、辞典・辞書類、複合動詞、多義語の 3 つの面から「打ち込む」に関する先行研究を概説する。第 3 節では、語義及び共起名詞という観点から「打ち込む」の意味を詳しく分析する。最後に、第 4 節で結論を述べる。

## 2. 考察対象の資料と先行研究

### 2.1 辞典・辞書類

「打ち込む」は、辞典・辞書類において、以下のように記述されている。

(1)『広辞苑（第六版）』（以下、『広辞苑』）

- ①うって中に入れる。
- ②攻め込む。攻めかかる。
- ③遊びや博打に熱中して財物を使いつくす。
- ④熱心に思い込む。ほれ込む。
- ⑤ある事に熱中する。
- ⑥野球などで、球を打つ練習を十分にする。
- ⑦囲碁で、相手の陣内に石を打つ。
- ⑧囲碁で、同じ相手に勝ち越し、一段下の手合割に追い込む。
- ⑨相手の急所をつく。やりこめる。
- ⑩コンクリートを所定の場所に充填する。

(2)『大辞林（第三版）』（以下、『大辞林』）

- ①たたいて中に入れる。
- ②球・弾丸などを相手の陣に入れる。
- ③刀できりかかる。剣道で、相手に打ちかかる。
- ④精神を集中する。夢中になる。
- ⑤人の弱みを的確に突く。急所を突く。
- ⑥囲碁で、相手の陣の中に、自分の石を置く。
- ⑦コンクリートを所定の場所に流し込む。
- ⑧野球やゴルフで、球を打つ練習を十分にする。
- ⑨財産を使い果たす。
- ⑩こみあう。

(3)『デジタル大辞泉』（以下、『大辞泉』）

- ①上から強くたたいて中へ入れる。
- ②球技で相手の陣などに球を打って入れる。
- ③弾丸や矢を発射して敵に当てる。

- ④その事に全精力を注ぐ。熱中する。夢中になる。
- ⑤頭や精神に強く入れる。
- ⑥剣道・ボクシングなどで、相手のすきをついて打ってかかる。
- ⑦碁で、相手の陣内に石を打つ。
- ⑧テニス・卓球などで、相手のコートに、強烈な球を打ち返す。
- ⑨野球・テニスなどで、時間をかけて、多くの球を打つ練習をする。
- ⑩コンクリートを枠に流し入れる。
- ⑪順序なく入りまじる。入り乱れる。

(4)『複合動詞レキシコン』

- ①叩いて、中へ入れる。
  - ②打って（撃って）中に入れる。物事に集中する。
  - ③全精力を注ぐ。熱中する。
- (5)『新明解国語辞典（第三版）』（以下、『新明解』）
- ①たたいて中の方へ入れる。
  - ②コンクリートを必要な箇所に流し込む。
  - ③勢いよく投げ込んだり打ちのめさんばかりに攻撃を加えたりする。
  - ④（碁で）相手の陣形の中に石を打つ。
  - ⑤（野球・庭球などで）「自信を持って（確実に）打てるように」基本に忠実に、反復打撃練習をする。

(6)『外国人のための基本用例辞典』（以下、『基本用例』）

- ①打って中に入れる。
- ②一つの物事に心を入れて熱中する。
- ③相手に打ってかかる。

『広辞苑』『大辞林』『デジタル大辞泉』『複合動詞レキシコン』『新明解』『基本用例辞典』の①の記述から、「打ち込む」は「たたいて中へ入れる」（基本義）という意味合いを持っている。『広辞苑』の⑥、『大辞林』の②と⑧、『大辞泉』の②、③、⑧と⑨、『複合動詞レキシコン』の②と『新明解』の⑤は対応しているが、いずれも「弾

丸、球や矢を打って入れる」という意味合いを持っている。『広辞苑』の⑨、『大辞林』の③と⑤、『大辞泉』の⑥と『基本用例辞典』の③は対応しているが、「相手または相手のすきまたは急所をついて打ちかかる」という意味合いを持っている。『広辞苑』の⑦と⑧、『大辞林』の⑥、『大辞泉』の⑦と『新明解』の④は対応しているが、「碁で相手の陣内に石を打ち返す」という意味合いを持っている。『広辞苑』の⑩、『大辞林』の⑦、『大辞泉』の⑩と『新明解』の②は対応しているが、「コンクリートを所定の場所に流し入れる」という意味合いを持っている。『広辞苑』の③と⑤、『大辞林』の④、『大辞泉』の④と⑤、『複合動詞レキシコン』の②と③と『基本用例辞典』の②は対応しているが、「精力を注いで物事に集中する」という意味合いを持っているが、「熱中する」と類義関係にあるように思われる。

本稿はこの「打ち込む」を上述した辞書でまとめた「たたいて中へ入れる」（基本義）、「弾丸、球や矢などを打って入れる」、「碁で相手の陣内に石を打ち返す」、「相手または相手のすきまたは急所をついて打ちかかる」、「コンクリートを所定の場所に流し入れる」、「精力を注いで物事に集中する」といった語義がどのような行為を表すか、それらの意味特徴を分析する。

## 2.2 複合動詞における「打つ」「込む」

### 2.2.1 「打ち＋V」

#### 2.2.1.1 辞典・辞書類

まず、「打ち＋V」の辞典・辞書類において、以下のように記述されている。

(1)『広辞苑（第六版）』（以下、『広辞苑』）動詞「打つ」

①その意を強め、または音調をととのえる。

②瞬間的な動作であることを示す。

(2)『大辞林（第三版）』（以下、『大辞林』）

（接頭）〔動詞「打つ」の連用形から〕動詞に付く。

①下の動詞の意を強める。

- ②下の動詞の意を軽くする。ちょっと、少しなどの意を添える。
- ③下の動詞の意味を抽象化する。
- ④語調をととのえる。

(3)『デジタル大辞泉』(以下、『大辞泉』)

- ①〔接頭〕動詞に付いて、その動作・作用を強めたり、語調を整えたりする。
- ②また、少し、ちょっと、の意を添えることもある。

『広辞苑』『大辞林』『大辞泉』の①の記述から、前項動詞「打ち＋V」は「動詞に付いて、その動作・作用を強める」という意味合いを持っている。『広辞苑』の①と『大辞林』の④は対応しているが、「語調または音調をととのえる」という意味合いを持っている。『大辞林』の②と『大辞泉』の②は対応しているが、「ちょっと、少しなどの意を添える」という意味合いを持っている。

#### 2.2.1.2 先行研究

柴田他(2002: 186-187)によれば、「打つ」は物を動かすことによって、何らかの結果をもたらそうという動機から出た行為である。語彙的複合動詞「打ち～」からもこういった特徴が見られるという。

石井(2007: 72、113)によれば、前項動詞(V1=打ち)が語彙的な接頭辞として後項動詞(V2)の表す運動の様態面を形式的に限定する(強調の意を添える)という構造を「語彙接頭辞構造」註1と呼ぶ。語例を見渡すと、接頭辞の「打ち」をつけても動詞全体の語彙の変化は生じないが、後に来る動詞(後項動詞、V2)を強めたりする働きがあるという。つまり、接頭辞の「打ち」は副詞的な機能を持っているといえる。

李森(2013: 9)によれば、「相手の脇腹にフックを力任せに打ち込む」、「毎朝竹刀を100回打ち込んでから朝食を取る」のように、「打つ」は「込む」と結合することによって、主体が満足できるような行動を行うという意味が生じると考えられる。語彙的複合動詞「打ち～」の意味は、「打つ」の諸意味に関連付けられるものがほと



んどである。語彙的複合動詞「打ち～」の前項動詞「打つ」は行為全体を実行する手段であり、後項動詞は行為の動機、もしくは結果の語例が圧倒的に多いという。また、後項の意味が語全体の主たる意味になるが、「打ち～」と共起する名詞を観察してみれば、「打つ」との関連性が強いことも明らかになった。つまり、語彙的複合動詞「打ち～」の多義性は「打つ」の意味、とくに基本義を中心におくことによって体系化できるといえる。

## 2.2.2 「V + 込む」

### 2.2.2.1 辞典・辞書類

まず、後項動詞「～込む」の意味は辞典・辞書類において、どのように記述されているか考察したい。

(1)『広辞苑（第六版）』（以下、『広辞苑』）

- ①中へ、内への意を表す。
- ②すっかりそうなる意を表す。
- ③みっちり、または十分にそうする意を表す。

(2)『新明解国語辞典（第三版）』（以下、『新明解』）

- ①何かがその中に入る。また、そうした状態にする。
- ②ある極限状態に達するまで何かを続ける。
- ③そのことばかりが気になって、心が閉鎖的な状態になる。

(3)『外国人のための基本用例辞典』（以下、『基本用例辞典』）

- ①動詞の後について、「中に入る」または「中に入れる」という意味を加えることば。
- ②動詞の後について、「すっかりそうなる」または「そうしてしまう」という意味を加えることば。
- ③そのことばかりが気になって、心が閉鎖的な状態になる。

このように辞典・辞書類では、後項動詞「～込む」は概ね「内部移動」の用法（「中に入る、中に入れる」）と「すっかり、みっちり、十分に」などの意味を添える用法に分けられる。

#### 2.2.2.2 先行研究

姫野（1978）と姫野（1999）は、「～込む」の意味について、次のように分類している。

（1）内部移動（主体または対象がある領域の中へ移動することを表す）

- ①閉じた空間。（流れ込む、駆け込む、投げ込むなど）
- ②固体。（植え込む、埋め込むなど）
- ③流動体。（漬け込む、もぐり込むなど）
- ④間隙のある集合体または組織体。（染み込む、絞り込むなど）
- ⑤動く取り囲み体。（くるみ込むなど）
- ⑥自己の内部。（くおれ込む、崩れ込むなど）
- ⑦その他。（覗き込む、見込むなど）

（2）程度進行（動作・作用の進行により程度が高まりある密度の濃い状態に達することを表す）

- ①固着化。（眠り込む、黙り込む、考え込むなど）
- ②濃密化。（老い込む、冷え込む、咳き込むなど）
- ③累積化。（走り込む、使い込む、磨き込むなど）

姫野（1978）と姫野（1999）は「～込む」を大きく内部移動と程度進行に分類し、内部移動を表す表現は「移動先の領域が有する形態の特徴」によって「閉じた空間、固体、流動体、間隙のある集合体または組織体、動く取り囲み体、自己の内部、その他」の7つに分けられるとしている。一方、程度進行を表す表現は「前項動詞の意味特徴」によって「固着化、濃密化、累積化」の3つに分けられるとしている。つまり、姫野は「～込む」の用法の分類（内部移動と程度進行）に重点を置いているが、内部移動というカテゴリーと程度進行のカテゴリー格の関係性に関する検討は行っていない。また、「投げ込む」と「投げ入れる」のような類義語との意味的差異もうまく説明できていない。

中村（1998）は複合動詞の前項と後項の関係や各項の役割から、複合動詞を性質の異なったいくつかの型に分けて、それぞれの型ご

とに多様な表現領域が存在することを指摘している。言語認知の立場から複合動詞「～込む」の前項動詞の特徴を詳しく分析し、後項動詞との結合の特性について考察している。

松田（2001）は田中（1990）、田中・松本（1997）、国広（1994）の研究を参照して、認知意味論の観点から「～込む」のコア図式を提案している。コア図式は、特定の語が表しうるスキーマ的なイメージが全部描き出されたもので、文脈によって図式の中で焦点化される部分が違ってくると指摘する。

松田（2004:76）は「～込む」の用法について、次のように分類している。

- （1）前項動詞は「内部移動」を含意しない A タイプ。（飛び込むなど）
- （2）前項動詞自体が「内部移動」を含意する B タイプ。（入り込むなど）
- （3）前項動詞が示す状態へ変化とその状態への固着 C タイプ。（冷え込むなど）
- （4）前項動詞の反復行為により生じる状態変化 D タイプ。（打ち切るなど）

松田（2004）は、（4）の D タイプが、（1）の A タイプと（3）の C タイプから派生された用法であると述べているだけで、それに対する論証は行われていない。

金（2010）は認知言語学の基本理論に基づき、複合動詞「～込む」と関わっている身体的・経験的動機付けを 3 つの側面から検討している。図式を用いることによって、内部移動のほかに、反復の意味にも解釈できる中間段階を経て、反復の意味を有する新しい構文スキーマが抽出できるようになることを示している。

睦（2012）は「程度進行」の意味を持つ「～込む」をカテゴリーカルな意味や構文構造により、自他合わせて 11 のグループに分けた上で、前項動詞の意味特徴、構文構造、例文内で共起する名詞や副詞の意味特徴について、グループ間での比較を行っている。

上記の先行研究は複合動詞「～込む」の意味を探るために行われたものであるが、「～込む」の共起名詞や多義的な意味に関しては明らかにされていない。そこで、本稿では複合動詞「打ち込む」を考察の対象とし、その共起名詞や多義的な意味について考察する。

### 2.3 複合動詞「打ち込む」の多義的な語義

多義語とは、同一の音形に、意味的に何らかの関連を持つ2つ以上の意味が結びついている語を言う(国広 1982)。語の意味が拡張、あるいは変化して定着し、元の意味と共存すると多義語となる(靱山 2002)。そして、国広(2006: 12-25)では、語の現象素を区別の中心として、現象素による多義派生の型とそれに基づかない場合という二つの領域に分類し、多義語を分析している。

基本義とは、さまざまな意味拡張の起点となる語義であり、放射状カテゴリーの中心となるものである。本稿では靱山(2002: 107)、靱山・深田(2002: 107、2003: 142)、松本(2003)の論点を踏まえ、以下のような要件を満たしている語義を基本義(＝プロトタイプの語義)と認定する。

基本義は、「複数の意味の中で最も基本的なもののことであり、基本的であるということは、最も確立されていて、中立的なコンテキストの中で最も想起されやすいといった特徴を有する語義」と呼ぶ。

また、認知言語学においては、多義語にはプロトタイプの意味、すなわち基本義が存在し、そこからさまざまな動機付けにより意味が拡張していくと考える。このような基本義を中心に複数の意味が拡張していく形態は、多義語のカテゴリー・モデルであるが、その中でも「放射状カテゴリー」と呼ばれるものがある(ジョージレイコフ 1993)。

次にカテゴリー拡張の動機付けとして必要とされるのが、メタファーとメトニミーという比喻の下位分類を述べる。靱山(2002: 65)は、「メタファーは二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、

一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩」としている。そして、靱山（2002：76）は、「メトニミーは二つの事物の外界における隣接性、さらに広く二つの事物・概念の思考内・概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩」とし、「シネクドキーはより一般的な意味を持つ形式を用いて、より特殊な意味を表す。或いは逆により特殊な意味を持つ形式を用いてより一般的な意味を表す比喩」と定義している。

本稿は、「打ち込む」の持つ語義を基本義と比喩の観点から考察する。

### 3. 「打ち込む」の意味分析

#### 3.1 語義から見た「打ち込む」

**語義 1（基本義）：**＜人が＞＜ある物をたたいて中へ入れる＞

- (1) 彼女は、光る鉾でとめられた垂布の、深い皺の間々に、額に汗を掻いて、太い釘を打ち込む彼の白い腕を見る事が出来た。
- (2) 忽ち二人は襟を握って、無数の釘を打ち込むように打ち合った。

例（1）は、主体（彼）が「釘」を「打つ」行為が明示されている。例（2）は、「釘」を「打つ」行為が比喩表現として「互いに激しく相手を打つ」行為である。語義 1 は、＜主体があるモノを（すっかり、みっちり、十分に）たたいて中へ入れる＞ということを表し、「他動詞＋自動詞」から構成され「他動詞」として働く。

**語義 2：**＜主体が＞＜野球・テニスなどの場面である球類、矢、弾丸などを打って入れる／打ち返す＞

- (3) 前のパーティが下手でボールを左右の林に打ち込むとか、のろのろとプレイをすると全体の進行が遅くなる。

- (4) 片目でもボールとの距離感、感覚を身につけるにはボールをたくさん打ち込むしかない！
- (5) 明日から大谷以外の先発を打ち込むしかない。

例(3)は、主体(人)が「ボール」を林に「投げ入れる」行為である。例(4)は、主体(人)が「ボール」を「打ち返す」行為である。例(5)は、「先発」を「打ち返す」行為が比喩表現として「野球・サッカーなど団体で行うスポーツで試合の最初から出場する」行為である。

語義1は、「あるモノをたたいて中へ入れる」ということを表しているが、語義2の「打ち込む」はさらに進んで「野球・テニスなどの場面で、ある弾丸、球類や矢などを(すっかり、みっちり、十分に)打って入れる／打ち返す」ということを表し、「他動詞＋自動詞」から構成され「他動詞」として働く。語義2は、語義1と同様に「あるモノをたたいて中へ入れる。」行為を前提としている。その前提となる行為は具体的な「モノ」(くぎ、ボール)をたたくという行為である。このことから、語義2は語義1から意味拡張が成り立っていると考えられる。

**語義3：<主体が><剣道・ボクシング、碁などで相手または相手のすきをついて、相手の陣内に打ってかかる／打ち返す>**

- (6) 実戦は白53・55と厚くさせたので、白57に打ち込まれました。
- (7) 西南戦争のある実戦時の話に「隙のない構えの相手に攻めあぐんだが、思い切って打ち込むと相手は剣で受けたが、体勢が崩れたので二の太刀を見舞い、勝った」というものもある。
- (8) 剣道で相手を打ち込むチャンスというのは様々な状況があります。

例（6）は、主体（人）が「囲碁の白 53・55」を相手の陣内に「白 57 に打ち返す」行為である。例（7）は、「打つ」行為が「隙のない構えの相手」に対して、「打ってかかる」行為である。例（8）は、「打つ」行為が「剣道の相手」に対して、「打ってかかる」行為である。語義 1 は、「ある物をたたいて中へ入れる」ということを表しているが、語義 3 の「打ち込む」はさらに進んで「剣道・ボクシング、碁などの場面で、相手または相手のすきをついて相手の陣内に（すっかり、みっちり、十分に）打ってかかる」ということを表し、「他動詞＋自動詞」から構成され「他動詞」として働く。語義 3 は、語義 1 と同様に「あるモノをたたいて中へ入れる。」行為を前提としている。その前提となる行為は具体的な「モノ」（囲碁、相手）に対してたたき行為である。このことから、語義 3 は語義 1 から意味拡張が成り立っていると考えられる。

#### 語義 4：＜主体が＞＜コンクリートのある場所に流し入れる＞

- （9）このコンクリートは打ち込む場所の打ち継ぎ面が乾いていても打ち込めない。

例（9）は、「打つ」行為が「コンクリート」という対象を、「流し入れる」行為である。語義 1 は、「ある物をたたいて中へ入れる」ということを表しているが、語義 4 の「打ち込む」はさらに進んで「主体がコンクリートのある場所に（すっかり、みっちり、十分に）流し入れる」ということを表し、「他動詞＋自動詞」から構成され「他動詞」として働く。語義 4 は、語義 1 と同様に「あるモノを中へ入れる」行為を前提としている。その前提となる行為は具体的な「モノ」（くぎ、コンクリート）に対して行う行為であるが、「打ち込む」の意味としては「たたいて中へ入れる」から「流し込む」に変わる。このことから、語義 4 は語義 1 から意味拡張が成り立っていると考えられる。

語義 5：＜主体が＞＜精力を注いで、ある物事・芸術・行動に夢中になる＞

(10) 彼の趣味が高じた「行動心理学」の研究に打ち込むようになったのは、五年ほど前からである。

例(10)は、「打つ」行為が「行動心理学の研究」に対して、「労を惜しまずやる」行為である。語義1は、「あるモノをたたいて中へ入れる」(「対象が移動した後の位置に入って、なかなかその中から出てこない」)ということを表しているが、語義5の「打ち込む」は文脈から「精力を注いである物事・芸術・行動に(すっかり、みっちり、十分に)夢中になる」ことが読み取られれば、「夢中になる」または「熱中する」という語用論的な含意が焦点化されて解釈されることが考えられる。つまり、語義1の具体的な「モノ」(くぎなど)から抽象的な「モノ」(趣味など)に対して行う行為であるが、「打ち込む」の意味としては語義1の「たたいて中へ入れる」から語義5の「モノに熱中する」へと変化していくことから、語義5は「他動詞＋自動詞」から構成され「他動詞」として働き、語義1から意味拡張が成り立っていると考えられる。

つまり、「打ち込む」の多義構造は図1に示す通りである。

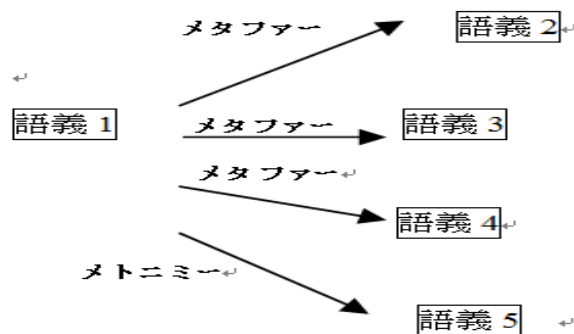


図1「打ち込む」の多義構造



### 3.2 共起名詞から見た「打ち込む」

本稿では国立国語研究所の『少納言コーパス』(BCCWJ) から「打ち込む」の用例を抽出した。この節では、国立国語研究所(2004)『分類語彙表増補改訂版』における認知領域の分類表で「打ち込む」の共起名詞を考察する。

#### 3.2.1 人間活動-精神及び行為

- (11) 何か趣味をもつと、人生が二重にも三重にも楽しくなりますよ。自分の職業や事業一本に打ち込むのは成功する望ましい方法だ。

例(11)では、共起する名詞は「職業や事業、治療など」は「1.3 人間活動-精神及び行為」の「活動、事業」である。夢中になる「活動、事業+二」がすべて明記されている。例(11)のように、「1.3 人間活動-精神及び行為」の「活動、事業」を用いる使用例(39.41%)が一番多く使われ、「人が精力を注いである物事・芸術・行動に夢中になる」という意味を表している。

#### 3.2.2 生産物及び道具

- (12) 打ち水して湿らせたうえで生コンを打ち込むのがプロです。  
(13) ライブキングに飲み込まれた光太郎と健一の愛犬ポチを救うためにライブキングの腹にコンドルから高圧パイプを打ち込んで、穴を開ける作戦。

例(12)と例(13)では、共起する名詞は「生コン、高圧パイプ」は「1.4 生産物及び道具」の「生産物、資材」である。「資材」を打ち込む場所が明記されている場合(例(13)の「コンドルから」)もあれば、明記されていない場合(例(12))もある。

- (14) くさびを重くて大きなハンマーで打ち込むと、ほとんどの木は割れてきます。

例（14）では、共起する名詞は「くさび」は「1.4 生産物及び道具」の「生産物、資材」であり、「ハンマー」は「くさび」を打ち込む「手段（デ格）」である。

例（12）-例（14）のように、「1.4 生産物及び道具」の「生産物、資材」を用いる使用例（36.45%）が二番目に使われ、「ある対象をたたいて中へ入れる」という意味（基本語義）を表している。

### 3.2.3 抽象的關係

- (15) ケータイやパソコンでページを開き、「教室」と入力し、  
続いて住所を打ち込む。

例（15）では、共起する名詞は「住所」は「1.1 抽象的關係」の「場所など」である。打ち込む「場所＋ヲ」が明記され、「ケータイやパソコン」（のキー、ボタン）は「住所」を打ち込む「手段（デ格）」である。この種の使用例（16.75%）が三番目に使われ、「ある対象をたたく」という意味を表している。

### 3.2.4 自然物及び自然現象

- (16) そりの強い長さ六十センチほどのものだった。型稽古は日本の剣道のように面や胴に打ち込む型があるわけではない。

例（16）では、共起する名詞は「面や胴」は「1.5 自然物及び自然現象」の「身体など」である。打つ「身体＋ニ／へ」が明記されている。この種の使用例（3.94%）が四番目に使われ、「剣道の相手に対して身体部位をたたく」という意味を表している。

### 3.2.5 人類活動的主体

- (17) 全く取り合わない老人に対し、いら立った武芸者が木刀で打ち込むと、老人は少しも騒がず囲炉裏にかかっていた鍋

の蓋で受け止める。

例（17）では、共起する名詞は「老人、相手」は「1.2 人類活動的主体」の「相手」である。打つ「相手＋ニ」がすべて明記されている。この種の使用例（3.45%）が一番少なく使われ、「剣道の相手に対してたたく」という意味を表している。

つまり、「打ち込む」の語義と共起する名詞は次の表 1 に示すとおりである。

表 1 「打ち込む」の共起する名詞と語義

語義	格助詞	分類語彙表	共起名詞
語義 1	ヲ格	1.1 抽象的關係	化学物質など
	ヲ格	1.4 生産物及び道具	材木、くぎ、くさび、画鋸、丸太杭、鋼矢板、板など
語義 2	ヲ格	1.1 抽象的關係	ボール、アドレス、届け先、数文字、番号、アルファベットなど
	ヲ格・ニ格	1.4 生産物及び道具	伝票など
語義 3	ヲ格	1.1 抽象的關係	打撃部位など
	ニ格・ヲ格	1.2 人類活動的主体	相手など
	ヲ格・ニ格	1.4 生産物及び道具	黒（碁石）、白（碁石）など
	ニ格・ヘ格	1.5 自然物及び自然現象	急所、眉間、面や胴など
語義 4	ヲ格	1.4 生産物及び道具	コンクリート、生コンなど
語義 5	ニ格	1.3 人間活動-精神及び行為	野球、スポーツ、剣道、レース、左フック、教育、事業、治療、意識、けいこ、習いごと、修行、研究、探求、捜査、試験、改良、学問の道、プロジェクトなど

#### 4. おわりに

本稿は、辞典・辞書類、国立国語研究所の『少納言コーパス』（BCCWJ）の用例から、「打ち込む」に関する語義及び共起名詞を明らかにすることを試みた。上述した分析結果を以下の5点にまとめることができる。

- (一) 辞典・辞書類の基本語義は「人がある物をたたいて中へ入れる」ということを表し、「打ち込む」の共起する名詞は「2.3 人間活動-精神及び行為」の「活動、事業（ニ格）」の用例が一番多く使われている。それらは、「人が精力を注いである物事・芸術・行動に（すっかり、みっちり、十分に）夢中になる」という意味を表し、「他動詞＋自動詞」から構成され「他動詞」として働く。
- (二) 「打ち込む」の共起する名詞は「1.4 生産物及び道具」の「道具（ヲ格）」の用例が二番目に使われ、「ある対象を（すっかり、みっちり、十分に）たたいて中へ入れる」という意味（基本語義）を表し、「他動詞＋自動詞」から構成され「他動詞」として働く。
- (三) 「打ち込む」の共起する名詞は「1.1 抽象的關係」の「本体、作用（ヲ格）」の用例が三番目に使われ、「ある対象を（すっかり、みっちり、十分に）たたく」という意味を表し、「他動詞＋自動詞」から構成され「他動詞」として働く。
- (四) 「打ち込む」の共起する名詞は「1.5 自然物及び自然現象」の「身体（ニ／へ格）」用例が四番目に使われ、「剣道の相手に対して身体部位を（すっかり、みっちり、十分に）たたく」という意味を表し、「他動詞＋自動詞」から構成され「他動詞」として働く。
- (五) 「打ち込む」の共起する名詞は「1.2 人類活動的主体」の「相手（ニ／ヲ格）」用例が一番少なく使われ、「剣道の相手に対して（すっかり、みっちり、十分に）たたく」という意味を表し、「他動詞＋自動詞」から構成され「他動詞」として働く。

く。

以上の考察から、「打ち込む」の意味と統語的特徴としては、「ヲ格」を伴う場合、「対象の外部から中への移動」（基本義「対象が移動した後の位置に入って、なかなかその中から出てこない」）を表しているが、「ニ格」を伴う場合、「主体が精力を注いである物事・芸術・行動に夢中になる」という意味にまで拡張される。また、「打ち込む」が「他動詞＋自動詞」から構成され、前項動詞「打つ」と後項動詞「込む」が両方ともに具体的な意味を示す複合動詞である。なお、本稿で考察した「打ち込む」は主に「対象の外部から中への移動」という「対象の内部移動」の意味を表すだけではなく、松田(2004)の B タイプ(「打つ」自体が内部移動を含意する)、姫野(1978、1999)の「固体(食い込む、擦り込む)」の分類に属しているが、複合動詞「植え込む」や「埋め込む」のような類義語との意味的差異(共通点と相違点)に関しては、今後の研究課題に譲りたい。

#### 参考文献

- 浅尾仁彦(2007)「複合語の生産性と文法的性質」『日本言語学会第134回大会予稿集』、pp.416-421
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎(1996)『動詞意味論一言語と認知の接点』くろしお出版.
- 影山太郎(2013)『複合動詞の最先端－謎の解明に向けて』ひつじ書房
- 影山太郎(2014)「日本語複合動詞の言語類型論意義」『国語研プロジェクトレビュー』第5巻1号、pp.8-18
- 金丸敏幸(2004)「言語の主體的側面に関する認知言語学的アプローチ」『認知言語学論文集』4、pp.221-231.
- 金光成(2010)「複合動詞の意味拡張とその認知的動機付け－「V+こむ」を事例に－」『言語科学論集』16、pp.25-42
- 国広哲弥(1982)『意味論の方法』大修館
- 国広哲弥(1994)「認知的多義一現象素の提唱」『言語研究』106、pp. 23-43

- 国広哲弥 (2006) 『日本語の多義動詞——理想の国語辞典 II』 大修館
- ジョー・レイコフ (1993) 池上嘉彦・河上誓作訳 『認知意味論』、紀伊  
国屋書店
- 榎山洋介 (2002) 「多義語の複数の意味を総括するモデルと比喻」 山  
梨正明(編) 『認知言語学論考』 1、ひつじ書房、pp.29-58
- 榎山洋介・深山智 (2003) 「第3章意味の拡張」 松本曜 (編) 『認知  
意味論』 大修館、pp.73-134
- 田中茂範 (1990) 『認知意味論—英語動詞の多義の構造』、三友社
- 田中茂範・松本曜 (1997) 『空間と移動の表現』 日英比較選書 6、研  
究者出版
- 中村その子 (1998) 「日本語複合動詞の意味形成と特性: 言語認知の立  
場から」 『経営・情報研究: 多摩大学研究紀要』 2号、pp.65-155
- 姫野昌子 (1978) 「複合動詞『～こむ』、および内部移動を表す複合  
動詞類」 東京外国語大学 『日本語学校論集』 5号、pp. 47-70
- 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』 ひつじ書房
- 松田文子 (2001) 「コア図式を用いた複合動詞後項『～こむ』の認知  
意味論的説明」 『日本語教育』 111号、pp. 16-25
- 松田文子 (2004) 『日本語複合動詞の習得研究-認知意味論による意  
味分析を通して』、ひつじ書房.
- 松田文子 (2004) 『日本語複合動詞の習得研究-認知意味論による意  
味分析を通して』、ひつじ書房
- 松本曜 (2003) 『シリーズ認知言語学入門 第3巻認知意味論』 大修  
館
- 松本曜 (2009) 「複合動詞「～こむ」「～去る」「～出す」と語彙的複  
合動詞のタイプ」 由本陽子・岸本秀樹(編) 『語彙の意味と文法』、  
くろしお出版、pp. 175-194
- 陸俊秀 (2012) 「「程度進行」の意味をもつ複合動詞「VI+こむ」の意味と  
構造に関する考察」 『コーパスに基づく言語学教育研究報告』 8号、  
pp. 185-208
- 山梨正明 (1995) 『認知文法論』 ひつじ書房.

山梨正明（2000）『認知言語学原理』くろしお出版.  
山梨正明（2004）『ことばの認知空間』研究社.  
由本陽子（2005）『複合動詞・派生動詞の意味と統語』ひつじ書房.

### 辞書類

金田一京助など（1981）『新明解国語辞典（第三版）』三省堂.  
新村出（2008）『広辞苑（第六版）』岩波書店.  
文化庁（1978）『外国人のための基本用例文辞典』大蔵省印刷所.

### インターネット・Web ページ類

『大辞林（第三版）』：<https://www.weblio.jp/cat/dictionary/ssdjj>  
『デジタル大辞泉』：  
<https://japanknowledge.com/contents/daijisen/index.html>  
『複合動詞レキシコン』：<http://vvlexicon.ninjal.ac.jp/>  
『少納言コーパス』（BCCWJ）  
[http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/search\\_form](http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/search_form)  
『分類語彙表増補改訂版』  
[http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/goihyo.html](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/goihyo.html)